

【(株)アサノ大成基礎エンジニアリングの子会社である大分地熱開発(株)が協力

地熱発電で水素を製造 国内初、九重で始動 実証実験】

(写真左:大分地熱開発株式会社 代表取締役 中野勝志)



地熱発電で水素を造るプラントの運転開始ボタンを押す大林組の関係者ら=18日、九重町野上

地熱発電で水素を製造

国内初、九重で始動

実証実験

地熱発電が生み出す電力で水素を製造する国内初の実証実験が18日、九重町野上のプラントで始まった。

ゼネコンの大林組(東京都)が県内に豊富に存在する地熱資源に着目して開発した。水素は燃料として自動

車メーカーなどに出荷し、脱炭素社会を見据えた次世代エネルギーの可能性と供給網の構築について、2024年まで検証する。

約1500平方メートルの敷地に地熱発電と水素製造の設備を整えた。地下約700メートルから採取する蒸気や熱水で発電し、得られた電力で井戸水を電気分解する。取り出した水素を圧縮し、ポンプに詰めて配送する。

生産工程で炭素は排出せず、「グリーン水素」と呼ばれる。1日8時間稼働の場合で約8トンの生産能力がある。水素で走る燃料電池車(FCV)が600〜750キロ程度走行できる量に相当するという。

トヨタ自動車(愛知県豊田市)、ヤンマーパワーテ

クノロジー(大阪市)、大分EBL水素ステーション(大分市・津町)など県内外の5社・団体に自動車や船舶の燃料として供給する。現地であった運転開始と初出荷の記念式典で、大林組の山本裕一常務執行役員が「地元の協力のおかげで

開始にこぎ着けた。大分の資源で新たなエネルギーを生むのは地域づくりにもつながら」とあいさつ。来賓の広瀬勝貞知事は「脱炭素は世界の流れ。大分発の水素が成果を上げるのを期待している」と激励した。(渡辺天祐)